

白紙余談

新型コロナ騒動で改めて問われようとしている「あなた任せ」の愚

◇新型コロナウィルスが相変わらず猛威をふるっている。この騒動の辛さは、未知のウィルスが相手であるだけに「出口」がなかなか見えてこないことだろう。いつまでに、何をどれぐらい我慢していれば、この苦境の出口が見えてくるのか？ それが分からないことが、何よりも辛いし、不気味でもある。

◇と、そのようなことを心の中で思っていた矢先、ふと、目からウロコのような感覚を味わわせてくれる文章に出遭った。元朝日新聞記者の稲垣えみ子氏が、雑誌「AERA」に連載しているコラム『アフロ画報』（同誌8月16日・23日合併号）に掲載の「ロックダウンより、コロナにかかっても安心できる社会への転換を」というタイトルの記事だ。

◇世論の関心は今、このままの勢いで感染の爆発状態が募れば、ついにロックダウンに至るのか、というポイントに向けられている。そして自分も含めた大方の人は「それだけは避けたい」という気持ちと、人の流れを止めるには「そうした強制的な力が働かないとも無理なのか」という気持ちとのせめぎ合いに悩まされている。それが現状だろう。

◇だがそのようなこととうじうじ悩む姿勢は、要するに、国や自治体の発する指示や要請をただただ受け身に待っているからこそのことで、そこには「自分はどうするのか」という明確な意思がない。要するに未知のウィルスとの遭遇という初めての経験に、思考停止状態に陥っていたらしい。稲垣さんの記事を読んで、そのことに思い当たったのだ。

◇稲垣さんはいう。場当たりに発せられる緊急事態宣言のたびに右往左往させられてきた飲食店の人々は、国や東京都の要請はどうあれ「酒の提供を自主的に再開する店は五輪を境に急増」していると。それは「政策を行う方々に頼っても先はない」という判断から「私もそのような判断をしている一人」だと。ただし何をしてもいいということではない。「国判断ではなく自己判断で行動に注意しつつ、やるべきことはやる」ということなのだ。

◇実際、新型コロナによる死活問題に日々苛まれている人々にとって、国や東京都の場当たりの要請や指示は、実体の感じられないものでしかないだろう。新型コロナの感染拡大は爆発状態でも、五輪やパラリンピックはやる。田舎への帰省はダメでも、解散総選挙を目前にした国会議員のお国入りは黙認される。そんな矛盾ばかりの現在、日銭商売の人たちが自分のケツは自分で拭くと判断したとしても、当然と思われる。

◇かくして稲垣さんのコラムは、非常事態にもきちんと機能できる医療体制を早く構築し、「コロナにかかっちゃいけない社会から、かかっても安心できる社会への転換」を果たしてもらいたいと結ばれる。

◇いたずらに怖がり腰を引いていたのではダメ。安全に安全を重ねつつ、いざという時は自分で判断する。災害時の犠牲者の多くは自分の身を第一に守るための行動をとれない人とされる。それは何にでもいえる。業界企業の経営者の皆様は恐らく先刻承知のその真実に、遅ればせながらようやく気付いた次第だ。(E)